THE PRETTY BOY

There is only one constant in this tale,
one old-fashioned irreplaceable element that remains essential
in the pursuit of our vital intelligence objectives in
the nuclear-missile age—The skill of
the human being himself.

ザ・プリティ・ボーイ

落合信彦

光文社

ザ・プリティ・ボーイ

落合信彦

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—十二—十三
(〒112-11)
光文社　文芸編集部

ザ・プリティ・ボーイ

一九九三年五月二〇日　初版第一刷発行

著者　落合信彦
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三
電話　東京(〇三)三九四二—二二四一(代)
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　慶昌堂印刷
製本所　ナショナル製本

定価　一、四〇〇円
(本体一、三五九円)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　© Nobuhiko Ochiai 1993
ISBN4-334-92221-X　Printed in Japan
Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

ザ・プリティ・ボーイ

The Pretty Boy

〔主な登場人物〕

ジェイコブ・リーブマン……クリニック院長
ジェーン・ハリントン……その恋人
リック・パーキンス……ハリウッドの映画スター
ジョニー・サリンジャー……パーキンスの付き人
パスカル・ブーシェ……ウガンダで働くフランス人女医
ランディ・キューブリック……ロス・アンジェルス・タイムズ記者
クリス・サンダース……ＦＢＩ捜査官
ハーレイ・デイヴィッドソン……元刑事
ジョージ・カリヤケン……医大主任教授
サイラス・アインシュタイン……天才科学者
マルコム・ヴァーノン……ＣＩＡ保安局局長
サミュエル・バーンスタイン……ＦＢＩ国内防諜局局長

装幀／川上成夫　　写真／長尾猛（フォトニカ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

一九七五年　ロス・アンジェルス

カー・ラジオから流れてくるカントリー・ミュージックに合わせて口笛を吹きながら、ジェイコブ・リーブマンはサンタモニカ・ブルバードを東に向かってハンドルを握っていた。

路上に燃える陽炎は今日も市内がスッポリとスモッグに覆われ、典型的なロス・アンジェルスの真夏日になることを約束していた。

時計は九時を少々回っていた。あと二十分ほどでマリブにあるジェーンのビーチ・ハウスに着く。そして一日中彼女と浜辺に寝そべって命の洗濯をする。

リーブマンにとって丸一日の休みは一カ月半ぶりだった。その間、恋人のジェーンに会ったのはたった一度だけ。しかもごく短いランチでのデートだった。それでも彼女はグチひとつこぼさなかった。

彼女自身ロス・アンジェルスのテレビ局のニュース番組を担当するディレクターをして日々の

生活基盤がしっかりしているということもあるが、それ以上に彼の仕事の性質を彼女は誰よりも理解していた。つき合って三年以上になるが、その間仕事のためにデートを直前になってキャンセルしたり、一カ月以上会えぬこともたびたびだった。

普通の女だったらいやみのひとつも言うところだが、ジェーンに限っては決してそれはなかった。それどころかそんなときは、仕事に打ち込んでいる彼が一番セクシーだと口グセのように言った。リーブマンに変なプレッシャーを与えたくないという彼女の思いやりが彼にはうれしかった。

彼女のようなインテリジェンスと温かみをそなえた女性はそうざらにはいない。できることなら今年中にプロポーズしてみたいと彼は思い始めていた。ただ彼の離婚歴と十歳の年齢の差を彼女がどう受け止めるか、彼にはイマイチ確信がなかった。

ダッシュボードの中の無線が鳴った。彼はラジオの音楽を消して、無線マイクに手をのばした。

「こちらリーブマン、どうぞ」

「ドクター・リーブマン?」

秘書のドリスだった。リーブマンが眉をしかめて舌打ちした。今日は彼の休日であるということを彼女は知っているはずだ。

その彼女がわざわざ無線を使ってまで連絡をとってきたのは、よほどの緊急事態がもち上がっているに違いないからだ。多分、これでジェーンとの楽しい一日は取り消しになるだろう。

「お宅に電話したらいらっしゃらないので車で外出中と思いまして」
ドリスがすまなそうに言った。
「何かあったのか」
「パーキンス氏なのですが容態が急に悪化してるんです」
「リックが？」
「ええ、いまドクター・チャップマンが診ているのですが、手のほどこしようがない状態なのです。すぐいらっしゃった方がよいと思います」
「わかった。これから向かう。ああ、それからちょっと頼みたいんだが、ジェーン・ハリントンに電話を入れて今日は行けなくなったが、今夜七時ブラウン・ダービーで会いたいと伝えておいてくれ」
「わかりました」
「くれぐれも彼女に謝っておいてくれよ。ロジャー・アンド・アウト」
マイクを元に戻して、ハンドルを大きく左に切った。車はUターンしてバーバンクに通じるフリーウェイへフル・スピードで向かった。

2

ジョニー・サリンジャーはベッドのわきにひざまずいて、身じろぎもせずにリック・パーキンスの寝顔を見つめていた。

ついに最期の瞬間がやってこようとしている。先ほどリックが看護婦に酸素テントと点滴を取り払うよう命じたとき、彼女はそれを拒否した。リックはジョニーに頼んだ。ジョニーは躊躇なくその頼みに応じた。

それが過去三カ月間苦しみ続けたリックに対して自分ができる唯一のことだとジョニーは信じていた。そして点滴と酸素マスクをはずしたとき、ジョニーの心は不思議な安堵感に包まれた。

それにしてもなんというむごいことなのだとジョニーは神を呪った。

つい最近までハリウッドのスターとしてそのキャリアの頂点にあったリックが、いまは骨と皮だけの見るも無残な姿で、死の床に横たわっているのだ。

ジョニーは両手で頭を支えるようにして目を閉じた。できることなら自分が代わってやりたかった。前途洋々たるリックの人生にくらべれば自分の人生など何の意味もない。

ジョニーの口からため息がもれた。
リックに会ったのがつい昨日のことのように想い出される。
あれは二年前のことだった。故郷ネブラスカで大学を終えてすぐにジョニーはハリウッドにやってきた。小さい頃から映画にあこがれていた彼は、アメリカ中からハリウッドに集まってくる何万という若者同様、いつの日かスターになることを夢見ていた。
しかし、田舎から出てきた若者をハリウッドが赤ジュータンを敷いて迎えるわけもなかった。
昼間は演劇学校、そして夜はレストランでの皿洗いという日がしばらく続いたが、その間、テレビ・ドラマや映画の端役のオーディションを何度も受けた。百回以上受けたが結果はゼロ。夢と現実のギャップの大きさを見せつけられただけだった。一年間トライしたあと、俳優になることはきっぱりとあきらめた。
しかし、故郷に帰る気は毛頭なかった。ハリウッドの街が彼は好きだった。故郷オマハのような田舎臭さはなく、人々はオープンで寛容だった。
特に彼のようなライフ・スタイルを好む者にとってハリウッドは最も住みやすい街だった。ホモセクシュアルであるがためにオマハではいつもビクビクして行動せねばならなかった。ホモと知れただけで石を投げられたり、チンピラたちの暴力の対象となったものだ。
しかし、ハリウッドは違った。自分がホモと宣言しても誰もいやな顔ひとつしないし、ましてや干渉など全くしない。

演劇学校を辞めた後、ジョニーはあるレストランの車係としてフル・タイムで働き始めた。給料はそれほどでもなかったが、チップが多いため生活面での苦労は全くなかった。そのうえ客が彼を気に入ってデートを申し込んでくることも多かった。デートを受けると大抵の相手は小遣いをくれる。特にセックスに応じた場合は五百ドル単位の金をくれた。

ハリウッド・ヒルにアパートを借り、スポーツカーを乗り回し、休日にはロス市内に十軒以上もあるバスハウスと呼ばれるホモのたまり場をハシゴし、気に入った相手を捜してセックスに耽る。誰にも遠慮せず、誰にもしばられない理想的な生活だった。

しかし、時と共にそんな生活に疑問を抱き始めた。不安と倦怠感が入り混じったような感じに襲われ、精神的に不安定な状態に陥りつつあることは自分でもよくわかっていた。自分自身に対する嫌悪感ばかりでなく友人に対しても憎悪に似た感情を抱き、何日も自室に閉じ籠ったこともあった。そのままでは気が狂ってしまうと思った彼は思い切って精神分析医を訪ねた。

柔らかい照明のついた部屋で長椅子に横たわり、少し離れたところに医師がすわっていろいろな質問をしてくる。テレビ・ドラマなどではよく見るシーンだが、まさか自分がその主人公を演ずるなどとはそれまで夢にも思わなかった。

彼の生い立ちから成長期、両親との関係、異性関係など彼にとってはあまり話したくないようなことばかりを医師は訊いた。彼のイライラを察したのか、医師はそれらのことは現在の彼の心理状況に大いに関連があるのだと強調した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一度目のセッションは医師が質問し彼がそれに答えるだけというかたちで終わった。二度目、三度目も同様だったが、質問は彼のセックス・ライフや見る夢といったずっとプライベートなものに変わった。五度目のセッションが終わったとき、中間的な分析結果だがと前置きして医師が言った。

「君は罪の意識に苛(さいな)まれている。もちろん意識的にではない。―潜在意識―サブ・コンシャス、しかもかなり深いところでだ。君のライフ・スタイルをサブ・コンシャスが嫌っているんだ。サブ・コンシャスの中には君が小さいときから植え込まれたピューリタン的要素が詰まっている。

そのピューリタン的要素が現在の君の生活に対して猛烈に反発しているんだ。意識的には君は自由な生活を送っていると思っている。いや、本当にそう信じている。しかし、サブ・コンシャスはそれを許さない。このギャップが罪の意識を生む。小さいときから教え込まれた価値観や常識というものはいくら意識的には消せてもサブ・コンシャスからはなかなか消えるものじゃないんだ。

君のような保守的な地域で、しかも保守的かつ信心深い両親の元で育った者ならなおさらのことだ。自己嫌悪に陥るのはサブ・コンシャスが頭をもたげてくるからであり、友人に憎しみを抱くのは彼らに自分の姿を見るからなんだ。ゲイの人間がよくかかる典型的なディプレッション―鬱病―だ。心の病気だから気長に対処せねばならんよ」

ジョニーは鼻で笑った。両親は確かに厳格で信心深かった。しかし、いまでは彼らの存在さえ

忘れてしまっている。その証拠にロスに来て以来、彼らのことを思い出したことなど一度もなかった。

それを言うと医師がわが意を得たりとばかりに、

「意識としてはそうかもしれない。しかし、私が言ってるのはサブ・コンシャスなんだ。サブ・コンシャスは複雑きわまりなく、今日の心理学でもその機能は完全に把握されてはいない。火山に喩えれば噴火して出てくる灰が意識で、下の方で煮えたぎっている溶岩がサブ・コンシャスというところかな」

その夜、ジョニーは久しぶりにディスコへ行った。

ハリウッド・ブルバードの東のはずれにある〝クラウド・セブン〟という名のそのディスコは、ストレートな人種にとっては大した意味はないが、ゲイにとっては一種の名所だった。アメリカだけではなく世界中からのゲイがロスを訪れたら必ずここに来る。

映画スター、文化人、科学者、政治家など各分野で活躍している〝隠れゲイ〟たちの社交場であり、ここを知らぬゲイはもぐりとさえ言われているほどだ。入場料は百ドルとベラボウに高いが、中での飲み物、食べ物はいっさいタダとなっている。

ジョニーが着いた時間はまだ十時を少し回ったぐらいだったためか、客は半分ほどしか入っていなかった。ここが大入りになるのは二時以降だ。

派手な照明がギラつき、耳をつんざくばかりのロック・ミュージックが流れている。上半身裸

の者や皮ジャンと皮のパンツで身を固めた者、筋骨隆々とした上半身に鎖を巻きつけた者、女装姿の者などさまざまだが、女はひとりもいない。何組かのカップルがフロアーで狂ったように踊り、薄暗いコーナーで抱き合って体をくねらせている連中もいる。

ジョニーの姿を見つけて何人かが誘いをかけたが、その気にもなれず彼はカウンターに腰を下ろした。

トム・コリンズをなめながら彼は医師の言葉を思い出していた。〝心の病いと奴はぬかした。最初からゲイを病人ときめつけている。ヤブ医者め！〟

「何か言ったかい」

ジョニーはビックリして声のした方を見た。いつの間にかとなりに男がすわっていた。

「いや、別に……」

考え込んでいるとき、独り言を言うのは、悪いクセだということは自分でも知っていた。

「ここは初めてかい」

男が訊いた。

「いや……」

「そうか。でも見慣れない顔だな」

ジョニーは黙っていた。男が会話を始めたいのは明らかだった。

「御機嫌ななめだな」

「……」
「どうだい。一杯おごらせてくれないか」
「ほっといてくれよ！」
ジョニーが言って男に一瞥をくれた。次の瞬間まじまじと男の顔を見つめた。
「あんたは！……リック・パーキンス……!?」
男が笑いながらうなずいた。
「やっと反応してくれたな」
ジョニーはまだ信じられずに、相手の顔を見つめていた。
リック・パーキンスといえば、ジョニーが演劇学校に通っていた頃、すでにハリウッドで押しも押されもせぬ大スターとなっていた。
これまでに出演した映画は三十本以上。その大部分をジョニーは観た。伝説的スターであるジェームス・ディーンに似た甘いマスクとその演技力からディーンの再来とまでいわれていたが、最近はその肉体美を買われてアクション物にも出演している。
初めて彼が主演した映画を観たのは高校二年のときだったが、そのときジョニーは異様な胸の高鳴りをおぼえた。それは一ファンとしての感情ではなく、探し求めていた恋人にやっと会えたというエキサイトメントに似たものだった。
そのリック・パーキンスがいま自分のとなりにすわっている。しかもトレード・マークといわ

れるその深い緑色の瞳でこちらをジーッと見つめている。ジョニーは体中がほてって溶けてしまいそうな感じに襲われていた。
「まさか……しかし……でも……」
自分でも何を言っているのかわからなかった。
「おいおい、そんなゴーストを見てるような目つきはやめてくれよ」
ごくカジュアルな口調で言って彼が手を差し出した。
「リック・パーキンスだ」
ジョニーは震える手をそっと差し出して、リックの手を握った。温かみのある手だった。
「僕は……ジョニー……ジョニー・サリンジャーです」
「地元かね」
「いえ、オマハです。ネブラスカの」
「いい町だ。一度ロケに行ったことがあるよ」
「まだ信じられない……」
「何がかね？」
「大スターとこうしていることがです。夢じゃないかと……」
「一発くらわしてやろうか」
笑いながらリックが言って、手の平でジョニーの頬を二、三度柔らかくたたいた。

ジョニーの気持ちはいっぺんにリラックスした。
「でもパーキンスさん……」
「そう格式ばるな、お互いリックとジョニーでいこうじゃないか」
「ではリック、なぜなんです」
「何が？」
「なぜこんなところにあなたが……」
ジョニーの知る限り、リック・パーキンスはハリウッドきってのプレイボーイで、毎月女を替えてはタブロイド紙に話題を提供している役者だ。
その彼がホモのたまり場に来るなどとはとうてい信じ難かった。もしかしたら知らないで入ってきたのかもしれない。だがさっき自分に見慣れない顔だと彼は言った。とすると何度か来ているはずだ。
「オレが来ちゃおかしいとでも言うのかね」
からかうように笑いながらリックが訊いた。
「まさかあなたが……」
「ゲイとは思わなかったと言いたいんだろう」
ジョニーがうなずいた。
「オレはゲイさ。根っからのね。世間ではレディーズ・マンで通っているが、それは単なるPR

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com